

交通 評論



2009年(平成21年)のNHK番組「白い魔境」の再放送を見た。美しい富士も、冬は強風と雪崩の危険で別な顔を見せる。特に最高峰の剣ヶ峰は最大風速50m/s以上、時には突風が巻き上がり、吹きさらすため

体感温度はマイナス30度を下回る。登山家によると厳冬の富士登山はヒマラヤに匹敵する厳しさである。

2004年の冬まで、ここに気象庁の職員が勤務していた。日本一危険な公務員と言われた測候所職員はこの冬山を3週間交代で「通勤」していたのである。そのため72年間の有人観測の歴史の中で4名の殉職者を出している。

昨年12月、旧測候所勤務経験のある職員やOB・O

G約70名が御殿場に集まって、1932年(昭和7年)から数えて富士山気象観測80周年を祝った。気象庁は現在、バッテリーを使って気温、湿度、気圧などの無人観測を行っている。

筆者は山頂勤務経験はないが、気象大学校勤務時代に降水や大気試料の採取で使用を許され、また、2007年からNPO法人「富士山測候所」の一員として夏季の借用と利用を手伝っている縁で呼ばれた。

集まりではNPOの若い研究者・上田紗也子さんが「雲とエアロゾル」の講演を行い最近の有効利用の実態をアピールした。

過去に過酷な勤務に耐え台風から国民を守った先輩たちの中には、気象衛星に

とって替わられたとはいえ、測候所の無人化を惜しむ声もあり、現在、大気化学や宇宙線科学、高所医学など当初より広い分野の研究者が利用している現状を肯定的に受け止めて応援してください。

冬富士に思う

土器屋 由紀子

元測候所長・平井泰世氏が宴会の席で「いま測候所は「正業」に就いている

ね」と言われたのは大変有り難かった。山頂の風景の一部であったリーダーチームが撤去されたが、当時の日本の最新技術を寄せ集め、新幹線をモデルに風速100m/sに耐えるように設計された庁舎はまだ数十年は大丈夫である。各種の観測や富士山でなければでき

ない研究利用に十分耐えている。

最近の研究のトピックスを挙げると、国立環境研グループが二酸化炭素の通年観測に成功し、世界標準のハワイのマウナロア山のデータと比較している。エアロゾルや降水、微量気体の観測なども世界に発信しており、宇宙線や自然放射線の測定を行い航空機乗務員の宇宙線被ばくを推算する仕事などのほかに、永久凍土の研究や高山病のメカニズムを調べるために重心動揺計を用いて目まいを調べる研究などがある。

また、ヒマラヤ登山を目指す学生や山岳連盟の高所トレーニング、中学生の体験滞在、理科実験の教材作成など、富士山頂という特殊環境が役に立つ利用も行われている。

雷の観測にも富士山は最適である。冬の雷が日本海側の地上で観測されるのに比べて多くの夏の雷は高度4000m以上で発生するため、富士山頂など高所であれば直近での観測はできない。電源の維持管理に苦勞する側として、雷は少ないほどよいのだが、雷を待望する東京学芸大学の若い研究者たちと話し合っ

ており、宇宙線や自然放射線の測定を行い航空機乗務員の宇宙線被ばくを推算する仕事などのほかに、永久凍土の研究や高山病のメカニズムを調べるために重心動揺計を用いて目まいを調べる研究などがある。

前述のNHK番組に出演した登山家・岩崎洋氏が2007年以来、夏の管理運営の「山頂班長」として活躍している。安全面には自信を持っている。相変わらず資金繰りは苦しいが、これからできるだけ長く貴重な建物と先輩達のノウハウを生かして富士山頂の利用を続けたいと考えている。(江戸川大学名誉教授)

前述のNHK番組に出演した登山家・岩崎洋氏が2007年以来、夏の管理運営の「山頂班長」として活躍している。安全面には自信を持っている。相変わらず資金繰りは苦しいが、これからできるだけ長く貴重な建物と先輩達のノウハウを生かして富士山頂の利用を続けたいと考えている。(江戸川大学名誉教授)

前述のNHK番組に出演した登山家・岩崎洋氏が2007年以来、夏の管理運営の「山頂班長」として活躍している。安全面には自信を持っている。相変わらず資金繰りは苦しいが、これからできるだけ長く貴重な建物と先輩達のノウハウを生かして富士山頂の利用を続けたいと考えている。(江戸川大学名誉教授)